

ケンペルは元禄 3 年(1690)来日、1691、92 年 2 回、江戸参府に随行した。(日記は 1691/2/13-5/8)

一行の行程は、長崎の出島から小倉—下関—大阪—江戸 (3 週間余滞在)、往復の 3 ヶ月近い、323 里の見聞記。

#### 街道の状況。

- ・ 街道は幅広くゆったりしている。二つの旅行隊が触れ合うことも無くすれ違える。
- ・ 上がり (都へ) へ向かって旅するものは道の左側を、下り (都から出る) に向かうものは右側を歩くことになっている。
- ・ 街道には旅行者に進み具合が分かる里程を示す標柱があり距離が書いてある。(一里塚)
- ・ 標柱に、江戸の日本橋を基点に書いてあるので江戸からどれだけ離れたかが分かる。
- ・ 街道の両側には一本ないし数本の樹木を植えた二つの丘が向かい合って築かれていて里程標として役立つ。(一里塚)
- ・ 國や、大、小名の領地が終わる所には木か石の柱が立っていて国境と藩を示す文字が記されているのを見る。このような道標は街道が分かれる所にもある。(領境柱、傍示石)
- ・ 町や、村中を除いて道の両側に狭い間隔で松の木が植えられていた。旅人に日陰を作ってくれている。
- ・ 街道は、雨にたいして簡単な排水口があり低い田畑に流れ込むようになっている。両側に土手があり、雨水が流れ込むのを防いでいる。
- ・ 身分の高い人が旅行する場合は、街道は直前に箒で掃除され、数日前には砂が運び込まれ小山が作られる。これは雨の時、砂をまき道を乾かすためである。
- ・ 将軍一族、奉行などが旅行する時は、人々は二、三里ごとに路傍に木葉葺きの小屋を設け、その傍の側道の間を垣で仕切る。それで旅行者は用便か、一休みする。
- ・ 街道を管理する者は、近くの百姓が欲得づくで不潔なものを利用するので道路を清潔に維持する苦勞がない。毎日落ちる、松葉、松かさ、薪として、子供達は馬の後につき馬糞を拾い畑に運ぶ。旅行者の糞尿も拾い上げていく。百姓家の近くの道路脇には便所として造った粗末な小屋があり糞尿が溜めてある。
- ・ 擦り切れた人馬の糞ぞうりも焼いて灰にし、糞尿と混ぜて肥料にしている。これらを貯蔵しておく、地面に掘られた溜め桶が悪臭を放って不快である。
- ・ 山岳地帯を通る急な道もある。馬では進むことが出来ないので駕籠で担がれて登る。産地には例外なく清水が湧いていて、緑をくぐって旅ができ、特に春には花、樹木で旅を楽しませてくれる。
- ・ 東海道には河を渡らねばならないところがある。その土地には渡河のことをまかされたその場所に詳しい人頼むことになる。川で最も大変なのが大井川。雨が降ったりすると水かさが増し、数日間足留めに会うこともある。
- ・ 船で渡ることが許可されている川もある。代表的なのが富士川、天竜川、馬入川。
- ・ 橋が架けられているのは、瀬田橋、矢矧橋、吉田橋、六郷橋、日本橋。全ての橋は両側で二間だけ地面の上に延びていて、二つの仕切りのある欄干は翼のように左右に開いて突出している。

#### 街道での見聞

##### 家

- ・ 庶民の建物は国法で高さ 6 間以下とされている。住居でこれだけの高さはまれで、倉庫ぐらいである。大名なども一階建ての御殿で間に合わせている。一般の町家、民家で二階建てに会うが、非常に低く家の屋根だけで天井はなく、二階は家具を置くのに用いる。この建築様式は地震が多いからである。
- ・ 飾りを施し、清潔にし低い木造の家でも快適に過ごすようにしている。内部は簡素で、望み次第で広くも狭くもできる。襖は木枠がついていて、上に絵が描いてあったり、鮮やかに金箔を施した軽い紙でできているからこれをはめたり、外したりする。
- ・ 板を張った高い床は藁の芯を固く詰め、贅沢な縁飾りのついたきれいな敷物で被ってある。

- ・畳はさらしたイグサで織っており、国中どこでも、長さ一間、幅 半間。床・階段・戸口の柱・窓枠・廊下などには漆が塗られ、玄関の間には花模様の金、銀色の紙がはられている。
- ・家は杉や、松で建てられ、開け放すことができ、たいへん健康的な住居と考えてよい。
- ・上層部は太い梁で造られていることに気付いた。地震の時に下の軽い建物が重い梁に押さえられ互いに支え合うからだ、という。
- ・百姓の家はたいへん粗末で小さく、家屋は低い四つの壁からできていて、葦か藁の屋根で覆われている。床は家の中の後方で幾らか高くなっている。そこにかまどがしつらえてある。部屋にはきれいな畳が敷いてある。開いている戸口には藁縄で編んだ蓆が鎧戸がわりに巻き上げてある。これは出入りに支障はなく、通りから中を覗かれるのを防ぐためである。家具はほとんどなく、たまに鶏もいるが子沢山で貧乏の様である。

## 城

城は大抵、大きな河の岸辺か丘や高みに築かれている。広大な地域を占め、三重の要塞からなっている。どの城もきれいな水をたたえた深い堀や石か土の防壁と頑丈な門がある。重砲は備えていない。

- ・本丸 城の中核、國の主君、城主の住んでいるところ。白壁造りの三層、四層の塔が人目を引く。各階は軒蛇腹で囲んだように小さい屋根で取り囲まれている。
- ・二の丸 用人、城代、右筆が住み、余った土地は庭園、若しくは稲を植えたりする。
- ・三の丸 城の防備施設、下級武士や城の関係者の住まい。
- ・城外には広場があり、軍勢の参集、閲兵に用いる。よく維持されているが將軍の許可なしで手をつけることは出来ない。諸侯の城は大抵、町で半月状に囲まれている。

## 街

- ・町は家が建て込んでいて住民が多い。塀や土手はみられない。二つある町の門は毎夜道を閉ざされる。時には土塁が築かれていることもあり、また番所が置かれているところもある。
- ・街道で百姓に会うことはほとんどないが日雇いや、下僕の仕事をしたりする人や、旅行者に種々雑多なものを売る階層の人々によく会う。
- ・人の住んでいる公道には將軍の命令を伝えるための札の辻という、格子で囲まれた狭い場所を見受ける。各藩主が自分の名の基に公示する。四角い板に簡条書きに記し、高さ2間の杭につけて通行人に目につくようになっている。公示分の行が変わるごとに異なる内容になっている。

最も重要で一番古く大きなものはカトリック教の禁制、異端者審問の厳命、宣教師や一般信徒を密告するものに対する賞金のことが書いてある。非常に多くの告示が上下左右に突き立っていてほとんど余地がない。時には犯人探しの賞金の金、銀がかけてあることもある。

公示の柵は、都市ではその入口に、小さな町村ではその中ほどの通行人の目に付く所にある。

- ・時には何本かの十字架や柱が立っていて処刑場を見ることもある。それはいつも町村の西外れにあった。
- ・仏像を安置する寺は堂々とし高さや技巧的屋根やその他の美しさで著しく際立って見える。寺院は町村では高いところに、それ以外では山麓の水の湧出る小川や林苑の近くにある。寺院は松や杉で造られ中には彫刻された仏像が飾られている。中央には須弥壇があり、一体または数体の金を塗った仏像がありその前に二本の蠟燭がよい香りを立てて燃えている。全国いたるところ寺院で満ち僧侶の数は数え切れない。
- ・宮、神 日本古来の偶像を祀る神殿には、僧籍のない世俗の人が奉仕している。清潔でない公道からは離れたところにある。鳥居と呼ばれる凱旋門のような門を潜って広いこちよい参道が街道から信心深い人々を導く。鳥居は木や石でできている。幅広く丈の高い門のような骨組み、二本の横梁が上下に固定してある。中央に大きな額が掛けてある。祀ってある神の御名が大抵は金文字で刻まれている。
- 立派な参道を2-3百歩進むと粗末な木造の小屋、大きな物置のようなものが藪に覆われているのをよく見かける。中はがらんとしていて、時々、中央に金属性の鏡とか、数本の藁の束とか、その代わりに細く切った白い紙片が房のように、長い縄につけて下がっていたりする。すべてここが清潔で神聖であることを表す表示である。立派な鳥居のあるのは天照大神を祀る神社か、八幡社である。
- ・宗教上の対象となる石仏、異国の偶像、特に阿弥陀と地藏、そのほか異様な姿をした仏像が街道の分かれ道

や橋や寺院や霊場の近くに安置してある。通行人が拝むことができ、彼等に信仰心を起させ、旅すがら人生の転換を思い出させるためである。像の姿を紙に刷ったものを橋頭、高札場など人目につきやすいところに貼ってあるが拝むものを見かけない。

- ・ 一般の家々の戸口や柱に神仏の画像を刷った紙が貼ってある。これは疫病や不幸を寄せ付けたいためである。また貧乏除けのお札を見かける、これは泥棒除け。

## 宿

- ・ 主な町、村には領主設けた駅舎がありたくさんの馬、荷物運搬人、配達人など旅に必要なものを一定の賃金で雇うことができる。人馬の交換もできる。  
宿と呼ばれところは必要品や宿泊施設も整っている。一里半ないし四里毎にある。多くの書記や記帳係りが駅通の事務を執り、そこからあがる収入は藩主に納めなければならない。料金は距離、街道の良し悪し、飼料の値段如何できめられる。
- ・ 乗掛け 2個の行李と、一枚の敷物を積んだ馬は銭33。空尻 鞍を置いただけ銭25。・・・
- ・ 将軍や大名の手紙を運ぶ飛脚が待機している。昼夜、少しの遅れもなく休まず走り続ける。飛脚は手紙の差出人の定紋の付いた黒塗りの文箱に入れ、それを棒に括りつけ肩に担いで次の宿まで運んでいく。万が一のことを考え二人で運ぶ。将軍の手紙であれば大名行列でも道を明けなければならない。そのために彼等は鈴を鳴らして走る。

## 本陣

街道筋には旅館がかなり整っているが、非常に立派なものは宿場にある。そこには毎年行き来する大名達が宿をとる本陣という旅館は立派であるが、他と同様1階建てである。間口は普通の家と同じであるが奥行きは長さには40間もある。身分の高い人専用の入口もある。部屋はきれいで、畳、襖、衝立、窓にかかっている簾には少しの染みもみられない。部屋は家具もなくがらんとしている。よく見ると日本人が有難がる目ざらし貴重な置物が1-3個ある。暇な時はこれを鑑賞、近くのある坪庭歩いて気分転換をはかる。部屋で固定された壁はひとつだけ。壁は薄い。他の側は窓や、二重に溝のある、畳とおなじたかさの敷居と天井から1ないし2レイ低いところに渡された角材(鴨居)との間を動く襖で閉ざしている。思いとおりに閉めたり外したりできる。光の差し込む窓には戸袋があり、木の雨戸がり夜は閉ざし庭や縁側を塞いでしまう。鴨居と天井の間は壁になっている。天井は高価な木が張ってある。

固定した壁側には床がある。隅室の一種で床の上1フィートの高さで1エレ(55-88cm)ほど奥まった区画がある。普通は入口の向かい合った隅近くにある。一番の上座と考えられている。床の間の前の床は漆塗りになっていたがそこには2枚の立派な敷物が二重に折り重ねて第一級の座とする。

床の間近くに床脇があり2枚の板が上下になって付いている。違棚と呼ばれ、宿の主人や客の好みに合わせあつた貴重な書籍などを置くのが普通である。違棚の上のほうには木製の戸棚があるがこれは中に紙、硯、文書、書籍などを入れて置くためである。

客はその中に時々箱枕をみつけることがある。箱枕は立方体で中は中空、6枚の薄い板で組み立てられている。漆が塗ってありすべすべしてきれいで、長さは20センチ、幅や厚さはそれより小さい。

人々はそれを回転させ頭の位置を高くも低くもできるようになっている。旅行者は宿の主人からその他の寝具を期待してはならない。何も持っていなければ畳を下敷きとし、上着を掛け布団として利用するしかない。かたい詰め物をした立派な畳が敷かれた部屋の床板には内側を壁や石で四角に囲んだ落とし穴が造られていて冬になると畳を取り除き灰や炭を入れ、小さい櫓を上置きその上に布団をかける人々はその下に座って寒さから身を守るのである。

また、真鍮か陶器などで巧妙につくられた火鉢を部屋の中におく、灰の中に二本の鉄製の小さな棒が刺してあるが、これは火を挟んだりかき回すためである。

- ・ 便所は後屋の脇にあり、二つの戸口を通して入っている。中に入ると清潔な床の上に莫塵がし

いてある、素足で触れるのがいやな人は一足のイグサか藁で作った草履が置いてある。

用をたすやり方はアジアの流儀で、つまり、しゃがんで床の狭い穴の中にする。籾殻か刻んだ藁がいっぱい入っている長方形の桶が外から差し込んであって、それが悪臭を吸収する。身分の高い人たちの場合は穴の上のしゃがむ前のところに小さな板(きんかくし)、引き戸の取っ手にその都度一枚の白い紙を貼り付ける。便所の近くに手水鉢がありすぐ手を洗うことができる。それは普通丈が高く、まっすぐ立っている凸凹の石で、上のところは水を入れるためにくりぬき、新しい竹の柄杓が備えてある。そのうえ松か檜の蓋がしてあるが人々が頻りに蓋を取るところには竹のつまみが差し込んである。これは竹というものがいつもきれいでニスを塗ってあるような性質を持っているからである。

- ・ 浴室は、通常小さい庭の奥のほうに ヒノキ材で建てられている。その中に1つの蒸気の箱または貯蔵槽があるか湯の入った浴槽があるかである。旅行中の汗を流したり、疲れを取るために毎日入浴する。

こうゆうことは日本人の週間になっている。夕方になると早めに風呂を沸かしておく。とりわけ日本人の着物は簡単に脱げるので思い立ったら風呂に入るのに面倒ということはない。帯を解いてちょっと体を動かせば、もちろん下帯はべつだが、身につけたものはみんな自分の後ろに落ちて丸裸となる。

蒸し風呂の構造について。浴室の外側の窓際に地面から2エレの高さの箱または槽ができています。内部の高さは1間たらず、幅と長さは1間半。床には蒸気が下から出やすいように、また人がそこで使う洗いが流れ落ちるように、念入りに鉋をかけた細い板を2-3インチにならべてスノコになっている。

入浴するものは側面から引戸を開けて入る。両側に小さい木の押し窓があってそこから余分の蒸気を外に出す。蒸気の箱や槽の下部にある空間が地面のところから壁で仕切って囲んであるのは蒸気が他に逃げないためである。またその庭に面した側から釜が壁に塗り込んであり、その下にかまどがある。

そのかまどには煙が中に入らないように浴室の向こう側にも口が開けてある。釜の半分ぐらいは出張っていてそこから水や、薬草をいれる。出張った部分は揚げ蓋で閉ざしてあり下で火を焚くと蒸気は釜の残り半分開いているところから浴室の中へのぼってそこを満たすようになっている。浴室の中には水をいっぱい入れた桶と湯を入れた桶があるので入浴者は気ままに、必要に応じて使うことができる。

- ・ 異国の捕虜にとっての楽しみは小庭園で、後屋の幅だけあり、方形で裏木戸があり、白壁に囲まれているので坪庭といわれる。身分の高い人の屋敷、旅館にはあるが庭をつくる空間のないところでは接木した梅、桜、杏の老木が植えてあるくらいだが、古くて、曲くねって枝ぶりが変わっているほど上品で珍しく高価だと考えられている。後ろに空間のない旅館でも建物の中に開け放された明るい場所がとってあり金魚を入れた鉢や、珍しい植物を植えた鉢、盆栽などを装飾としておいている。

坪庭のポイントは、地面にはよく洗ってきれいにした川石、海石を花壇のように敷き詰めたり、撒き散らし、また一部には粗い砂を厚く敷き、たえず箒で平に掃きならし、その間にある不恰好な荒石は人が歩く踏み石に役立ちこのまじい美術的構成になっている。

又その中には花の咲く少しばかりの植木があり、中にはシュロや外来の丈の低い木もみかける。

庭の隅には築山や岩が釣り合いよく技術の粋を尽くしてうまく配置してある。庭は自然の山のように眺めである。青銅で鑄た鳥が石の間に飾ってあり、また祠が置いてあることも珍しくないがそれらはたいい切り立った岩の上に立っている。こちよ眺めを作り出すためである。その近くには細い流れが岩間を縫って流れ落ちている。

それに続いて密生した茂みや小さな森があり、それを造るにあたって腕のよい熱心な庭師は、並べて植えてもよく茂る樹木を選び、葉の大きさや、色によって植え方に工夫をこらし1つの大きな森のような外観を呈するような技術をもっている。

## 茶店の風景

街道には数え切れないほどの低級な旅館、小料理屋、居酒屋、茶店があり、一般の旅行者は僅かなぜにを払って上等ではないが暖かい軽い食事をとることができる。こういう小さな店は苦勞して生計を立てなければならぬ貧しい人がやっている。店は貧弱で粗末であるが人目を引くように工夫をこらしている。花の咲いている植物、庭園、さらさらと流れる小川があったり、花を活けた花瓶。着飾った娘が愛嬌を振りまきな

がらあたたかい飲み物を差し出す。客は菓子とか焼き物を待つこともなく求めて旅を続ける。すべてのものは特別の焼串とか竹の細い串をさして、屋台とか、小部屋の火の近くにさしてある。女主人や女中は人が遠くからやってくるのがみえると、一生懸命に火をおこし、食べ物がたった今煮え立て、焼きたてのようにみせかける。ほかの女達は暖かい飲み物を茶碗の中で掻きまき、おいしく泡立て、また冷たくして旅人の求めに応じて差し出す。その間にもしゃべるのをやめない。自分のところの食べ物を宣伝したり、ほかの店に負けまいとするかのようである。

店には茶や、お酒のほかに、まんじゅう、すなわち鶏卵大の小麦粉、中に砂糖と豆の粉を入れ蒸したポルトガル風の菓子。森に生えるクズという植物の根からゼラチン状のものを焼いてつくった菓子。鰻を切って火をとおした蒲焼。また焼いたり、煮たり、あるいは生のまま塩、酢に漬けたタニシや貝や小魚。小麦粉をねって薄くのし細長い紐状に刻んでゆでたうどん。よもぎとか海や森でとれる季節のものをよく洗い水と塩で煮て調理したもの……。そのほかいろいろあるが、土地が不毛で飢えに苦しんでたべようになつたもので種々の種子、菜根を煮たり焼いたりしたものである。こういった食品に加える煮汁は少量の醤油に酒でうすめサンショウの葉をかけたリまた刻んだショウガの根や柑橘類の皮をまぜたり、あるいはただ乾かしたショウガ、サンショウその他国産の薬味を粉にして振りかける。

みずばらしい茶店には種々の形や、色をした砂糖菓子がならべてあった。これらの菓子は見た目にはなにか楽しげではあるが味のほうはいただけない。砂糖は少ししか使わず、硬いのが普通である。噛んでも噛み切ることができない。

貧乏な旅行者は木版刷りの道中記（旅行案内書）を持ち歩きどの場所にどういふ食べ物があり、どこが一番よく、どこが一番安いかを知り腹ごしらえをすることができる。

旅行者はお茶以外に飲むことは少ないので街道沿いでは旅館、宿屋、料理屋、野原や森に茶店がある。

どこでもお茶を飲むことができる。しかし人々は若葉（高貴な人々が飲む）を摘んだ後の、あるいは前年から残っているこわい葉を使う。これらの古い葉は摘み取るとすぐに葉を巻くことをしないので平らな鍋の中でたえずかき混ぜながら強く炒り、藁で作った袋に入れ、屋根下の煙の当たるところに貯えておく。旅行者に茶の入れ方はすごく簡単。一握りかもう少し多量の茶の葉を小さい袋に入れるか、そのままやかんの中に入れ、水を入れて煮るのがその中に籠が入れてありそれで葉を押さえておき、きれいなお茶を汲むことができるようになっていた。それから柄杓でお茶を茶碗に半分ほど汲み、水を加えて温度を下げ客に出す。古い葉の茶は渋く灰汁があるが日本人はこれを好む。煮詰める内に頭によくない成分が消えると思っているからである。

### 街道で生活している人々、旅行している人々

この国の街道には毎日信じられないほどの人間がおり、季節によってはヨーロッパの市街と同じくらい人があふれている。7つの街道の内、東海道を四度も通ったのでその見聞をしるす。

この国は人口が多いこと、他の諸国民と違って非常によく旅行することである。旅行者の内注目すべき人々をあげると。

まず大小大名および幕府直轄の都市や地方にいる奉行やそのお供のものについて。（参勤交代の行列）彼等は一年のうち街道を往復する。つまり彼等は一定期間江戸に伺候し、そして帰国する。この旅行にいつも自分の家臣を連れて、身分や財力の許す限りの人数で立派な行列をつくる。最も大きい大名の場合は数日にわたって街道を満す。少数の従僕・荷物運搬の指揮者および輜重隊からなる（行列の）前駆がいつも二日間にわたって、しかも別々の隊を成して過ぎ。その後から藩主自身が武士の集団を率いて隊伍を整え進むのを見るのは普通でようやく3日目である。大大名の行列は2万人前後、小名の行列はその半分、直轄の都市、天領の奉行の行列は石高、官位により違い、100ないし200-300と思われる。

こんな人数の行列が2-3同時に通ることになったらお互いに迷惑。同じ宿場、村で出会った場合十分対応できない。そこで大大名は1ヵ月、小大名は1-2週間前に宿舎、宿場を一定の日数で予約、各町村に通過を知らせる。町村の入口、出口に丈の高い小さな板がついた竹ざおが立てられ、僅かな字数で、誰それが、何月何日にここを通過、昼食、宿所などを知らせる。（大大名：薩摩、加賀、紀州、尾張）

## 行列の様子

- (1) 前駆けするのは宿割役、書記役、賄方そのた下役。宿舎において君侯やその家臣のもてなしの準備。
- (2) 主君の身の回りの荷物は一部は網をかけた旅囊に入れ1つずつ主君の小さい旗や名前をつけて馬で運び、一部は箱に入れ主君の紋所をつけた漆塗りの皮で覆って運ばれる。各荷物ごとに監督者が付いて行くがその有様は見事である。
- (3) 長い一隊は乗り物や、駕籠や馬に乗っていく重臣や身分の高い人々の一団。各人の家柄や地位や身分に応じて槍、薙刀、弓、日傘、鉄箱や引馬をもった者を従えて行く。
- (4) 大名行列の本隊には特別な順序がありいくつかの隊に分かれていて、各隊ごとに引率者として隊長がいる。
  - ① 多少差はあるが、五頭の元気のいい引馬がいて、各馬毎に二人の馬丁が両側に付き添い、2人の従僕がその後に従う。
  - ② めいめい立派に着飾った5、6人あるいはそれ以上の担い手が鉄箱や漆塗りの小箱や漆を塗った籠を肩に担いでゆくがその中には主君が用いる数着の衣類やその他の身の周り品が入っている。  
おのおのの担い手には二人の付き添いが従っている。
  - ③ 十人またはそれ以上の、一人ひとり前後に並んでゆく担い手が薙刀や槍、漆塗りの木箱に入れた刀や鉄砲、それから矢筒に入れた矢と弓を持って進む。時にはこの一隊は間に鉄箱を担いだ人や引馬を入れ隊がもっと長くなることもある。
  - ④ ひとりずつ前後に並んで2、3人あるいはそれ以上の者が飾り槍をもって進んで行くが、その槍の上の方には鶏の羽の黒い房や何のものか分からないが野獣の毛皮とか、その他その大名特有な飾り物が付いていた。おのおのには2人の従者が後に従っている。
  - ⑤ 一人は黒いピロードの覆いをかぶせた日除けの笠を持ち二人の従者を従えている。
  - ⑥ 一人は日傘を持ち、笠と同じように覆いをかぶせ、従者を連れている。
  - ⑦ 数人の従者は鉄箱と勘定箱を運んでいたがそれらは漆を塗った皮で覆われ金色の紋所が付けてあり、それぞれに二人の宰領がついている。
  - ⑧ 大名の乗物には16人前後の護衛や先ぶれがいて、2人ずつ一組になっている。見るからに大柄な人物が選ばれこの役を勤めている。
  - ⑨ 大名が用いる乗物または駕籠は6ないし8人の仕着せをまとった男が担ぎ、交代のため同じ人数のものがついている。乗物の両側には2人ないし3人の近侍がいるが、彼等は主君が何かを求められたり、乗り降りされる時に、お世話をするためにいるのである。
  - ⑩ 黒塗りの鞍を置いた2、3頭の引馬がいるが、その最後の黒いピロードかけた乗掛馬の上には同じような布で覆った大きな安楽椅子が置いてある。各馬とも受け持ちの馬丁・従者が付いている。多くの大名行列ではこういう引馬は小姓たちが口を取る。
  - ⑪ 2人の槍持ち。
  - ⑫ 10人またはそれ以上の人が、おのおの2人ずつとなり、とてつもなく大きい籠を一本の棒の前後に吊るし肩に担いでいるが、これは実際に使うためというよりも見てくれのためである。これらの人々の他に、なお幾つかの鉄箱を担ぐ者が加わるのが普通である。
- (5) 6ないし12頭の引き馬とその口をとる馬丁や付き添いの者
- (6) 大名の家臣達の後続の行列には彼等の従者、槍持ち、鉄箱を担いだ従者。家臣の内何人かは籠に乗る。大名の子息が参勤交代の旅に加わる時は彼は自分の家来と父の乗物のすぐ後についてゆく。  
大名行列が進むとき、槍持ち、駕籠かきやそのほか仕着せをまとった従者を除けば皆黒一色の絹布の服を着て歩き、実に規則正しい見事な秩序保ち、きぬずれの音や人馬の動きで出るやむをえないざわめきの他、音もたてずにしずしずと行く有様は誠に不思議で賞賛に値する。  
これとは対照的に、槍持ちや駕籠かきは、着物の後ろの裾を非常に高くはしょっているので禪がいくらか

足しになっても、十分に隠す役目を果たさず、下半身をすべて露にしていることは実に笑うべきことである。

もっとおかしいのは近侍や飾りのついた槍、日傘、雨傘、箱などの担い手が、人の多く住んでいる街筋を通ったり、他の行列の側を進んだりするときはばかげた歩き方をする。この歩き方は、一步踏み出すごとに足がほとんどお尻にとどくまで上げ、同時に一方の手を前に突き出すので、まるで空中を泳いでいるように見えることである。こういう歩き方の時に、彼等は飾り槍や笠や日傘2-3回あちこち動かし、鉄箱も肩の上で踊っている。

乗物を担ぐ人は袖口に紐を通して結び、両腕をむき出しにしていた。かれらはある時は頭の上の方に高く上げた一方の手をのせもう一方の腕は手のひらを水平に伸ばし、そのうえ狭い歩幅で歩いたり、膝をこわばらせたりして、こっけいな恐ろしさを装ったり用心深い振りをしたりする。

身分の高い人が、茶店でお茶を所望したり、一服したり、用足しに小屋とか、農家の家に行く場合は報酬として主人に小判一枚を与える。昼の休みや宿泊の時はもっと多く支払う。

### 街道にみる人々・物乞い いろいろ

伊勢参りに来る人たちはどこからくるにせよ街道を通らなければならない。この参詣は一年中行われているが、特に春が盛ん。街道は彼等でいっぱいになる。老若、貴賤を問わず、男女の別なく、この旅から信仰やご利益を得てできるだけ歩き通そうとする。食べ物や、路銀を道中物乞いして得なければならない多くの伊勢参りの人たちは参府旅行する者にとって少なからず不愉快である。

ひっきりなしに彼等が近づいてきて、笠を脱ぎ、遠慮がちな声で「檀那樣、お伊勢参りの者に路銀を一文お恵みください」と声をかけるからである。

江戸や、奥州の住民には他の地方より、その筋の許可も得ず伊勢参りのたびに傾向がある。非行を犯して近く罰を受ける少年でさえ両親のところから逃げ出し伊勢に向かい赦免に効力があるに違いない免罪符をもらってくる。みんなが宿に泊まることができない。銭がなく、野宿したり、時には道ばたで病み疲れて死んでいく人を見ることがある。中には一年中街道で物乞いして過ごす人もいる。

街道で銭を集めるグループもいる。 その仲間のひとつ

4人が一組となり、公家や内裏の家来のように袖の広い白麻の衣服を着ている。二人はゆっくりした歩調で歩き、また時には立ち止まったりして、松の小枝や細かく切った白い紙をさげ飾った屋台を引いて運んで行く。その上には軽い材料で造った大きな鐘とか釜とかなかにか他のものが置いてある。これらは祖先や神々の古い物語から真似て作った物だという。3人目の人は上の方に白い房の付いている指揮棒のようなものを手に持って、屋台の上の神聖な物に敬意を表しながら進み、それにふさわしい歌をどら声で歌う。4人目の男は家々の前とか、施し好きの見物人のところへ行って布施を集める。このようにして彼等は夏中旅をして過ごすのである。

方々で巡礼を見かける。彼等は2-3人で日本全国にある有名な観音を祀る三十三の寺にお詣り旅を続ける。哀調を込め家ごとに観音経読み、ヴァイオリンやツィターを弾くドイツ人の浮浪者のように楽器を奏でるが、旅行者にお布施を求めようとはしない。まだ詣っていない寺の名を小さな板に順々に書いて襟の回りにつけている。その上彼等は木綿の胴着を着て特別な服装をしている。

冬でも腰に藁だけ巻きつけている人によく行き会う。こうした人々は両親や親友や、また自分自身の損ねた健康とかその他のことを布施を求めず、ひとりで休むこともなく歩きつづける。

さらに街道ではいろいろな乞食、大部分は若くて頭をきれいに剃った人たちがいっぱいいるのを見かける。聖徳太子が仏教を広めた時に、物部守屋と対立した時に、太子は守屋側の人物と区別するために仏教に帰依した男性に剃髪するように命じた。頭を剃った彼等に物乞いする自由を与えた。この風習が今日に至っている。

同じように剃髪した女性、比丘尼という教団がある。これは鎌倉や京都の尼寺の庇護を受けているので毎年、幾らか寄進しなければならない。彼女達は熊野やその近くにいるので熊野比丘尼と呼ばれている。日本を旅行していて最も美しい女性たちである。善良で魅力的に見えるこれらの貧しく若い女性たちはたいした苦勞もせず尼として物乞いの許可を受け旅行者から思うままに魅力的な容姿で大変うまく布施を巻き

上げる術を身につけている。物乞いして歩く山伏は娘にこの職業をやらせる。また比丘尼を自分の妻にする。彼女達の多くは娼家で賤けられ、年季が開ければ自由の身となり、2・3人一組となり籠や馬に乗った身分の高い人を待って、来れば相手に近づき歌を歌い、金離れのよさそうな人を見つければ何時間でも相手を楽しませる。彼女等は出家らしさ、貧しさのかけらもない。ござっぱりと着こなし、手甲をはめ、幅の広い日傘をかぶり、おしろいを塗り、短い杖を持ち、ロマンチックな羊飼いの女を思い出させる。

山伏達を作っている托鉢僧の教団について、山に登って己の身に難行苦行える修行僧とは違って、服装とか外見上の作法は真似ようとしているが、彼等は京都に住んでいる教団の団長の支配下にあり、毎年上納金を納め、その代わり、位階を受け、人目に付きやすい飾り標識をもらう。地方の有名な神社仏閣の近くに住み、旅行者から布施をもらう時は、寺の功德と清浄を誇らしげの表情で短く、法話し、核心を強調する時は金剛杖を鳴らす、法話の結びに法螺貝を吹き鳴らす。子供達にも法衣を着せ、頭髪を剃らせる。

この子供達の物乞いが旅人にとって一番厄介なのである。山道にさしかかると、ゆっくりしか歩けない、簡単に逃げ隠れできない、そういう場所で旅人を待ち伏せしている。そういうところにも比丘尼が混じっていて、ミツバチの大群のように旅人の回りに集まり、歌をうたい、法螺貝を吹き、熱弁をふるい、あるいは大声で叫ぶので、うるさくて聞き取ることができない。人々は寺の用事や世話にこのような人を利用しない。

もうひとつの物乞い。外見上立派な年配の男達である。彼等は出家、仏僧のように頭を剃り、法衣をまとっているのが喜びを受けるのに都合がよい。2人一緒になっているものもいる。彼等は細長い紙の棒のようなものを持っている。中に法華経の一部が刷ってある。彼等は勿論意味など分からないが、少しばかり暗誦している。かれらはたくさんの布施を期待している。時折り、そここの小川のほとりに座っているのを見かける。施餓鬼といって、死んだ人の霊に対して儀式を行っているのである。この儀式は死んだ人の名前前の書いてある何枚かの小さな経木を、何か文句を唱えながら煉獄の火を冷ますためにハナシキミの枝に水をつけ洗い清めるが、これは死者のためにミサにあたることをやっている。

通りすがりの人で水に入って身を清めようとする者は、僧のために広げてある蓆の上に銭をなげてやる。それに対して身分の高い物乞いほど礼を述べる習慣がない。

#### 身分の低い物乞い

いたる所で一人ひとり、道ばたで蓆を敷いて絶えず哀れっぽい声で、“なんまんだあ”を唱えている。

これは南無阿弥陀仏を短くしたもので、彼等が死んだ人の霊をとりなすものとして阿弥陀に呼びかける時に使う短縮形である。同時に自分の前に置いてある小さな鐘を木槌で叩く、これは阿弥陀の耳に届き、通りすがりの旅人も聞こえると信じている。

#### ある種の物乞いについて。

彼等は世俗的な衣服も着れば、僧衣をまとっていることもあり、開けた野辺の道端に小屋か祭壇を設けて、あるものはその上に黄金に塗った観音像を置いて、あるものは下手に描いた絵、阿弥陀、閻魔大王、地獄の絵図を掲げて、旅行者に、信心と同情心を起させ、彼等の心を揺さぶり喜捨という善行をさせるべくもくろんでいる。同じような服装をしているが地藏の杖のようなものを持って、道端に行儀よく座っている。沈黙をまもり、哀れっぽい表情だけで気づかせようとしている。

あるものは病みつかれ、あるものは丈夫で、胡弓や、琵琶を弾いたり、退屈しのぎの茶番は芸で見せ、旅人から銭を出させることがうまい。

街道筋には捕るに足らない小売商や農家の子供達、その数は多く、夜遅くまで歩き回っている。彼等は旅人につまらぬ物売りつけようと山と積んでいる。例えば、ほとんど甘味のない焼き菓子、穀物から作った菓子、酒の肴、水で煮た根菜、印刷した道中記、人馬の草靴、綱や紐・・・、所によっては藁、イグサ、竹、木などから作ったこまごまとした品物。村々には駕籠かき、馬に粗末な鞍を載せた馬方・・・。

最後に 村や町にある大小の旅館、茶屋、小料理屋などにいる淫らな女たちのことをのべる。彼女達は昼頃になると、着物を着替えおしろいを塗り、部屋の前の廊下から、たえず旅行者を眺めていて、一方の女はこちらから、もう一人は向こう側から甘ったるい声出して競り合い、上がっていくよう呼び寄せ

彼等の耳元でしきりにしゃべるのである。何件でも並んでいる宿場はとくにひどく、たとえば近くに並んでいる2村、赤坂、御油はほとんど旅館ばかり。どの家にも3～7人の女がいる。

日本の遊女の蔵とか共同の研磨機という異名を頂戴したのである。

このいかがわしい女たちと交わりを結ばずにいる日本人はまれなので、そのため記念の印をちょうだいして我が家に帰る人がよくあって、それで大変腹が立つのである

カロンが日本についての記述の中で美しい日本の女性を弁護して、許可を受けた公娼を除けば、こういうやり方で生計をたてること日本で否定するのは言いすぎである。といている。

他方の宿で客が多い場合は他の宿は喜んで娼婦を貸してやるのである。それも儲けになるからである。

このような習慣は 古のころからの習慣で、世俗的な皇帝、征夷將軍頼朝がすでに数世紀前に始めたのである。すなわち 彼の兵士たちが長い飽き飽きする遠征の旅路で、いらたらず、どこにもいる女たちを求めておのれの欲求を満たすことができるよう認めたのである。だから中国人が日本は中国の売春宿と呼んだ。中国では娼家と売春は厳罰を科し、禁止している。だから若い中国人が情欲さましに、金を捨てによく日本にやってくる。